風景デザインレター from 九州(第33号)

先週と今週は、JCCA 主催の「生物多様性戦略」の講習会を開催します。事務局幹事として、準備等進めてきましたが、先週の第１弾「生物多様性とは」の講演に来ていただいた九州大学の荒谷先生の講義はおもしろかったですねえ。生物の生き残り戦略の本質を 200 枚のスライドで話されました。

生物多様性の講義を聞きながら、考えたこと

【生物多様性と風景デザイン】

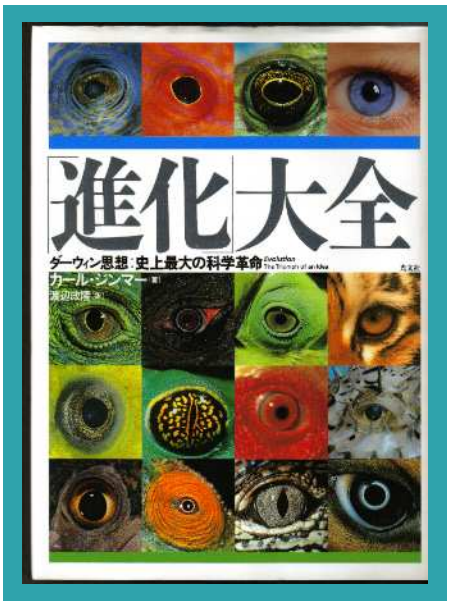
オオムラサキの生息にはエノキの木が、タナゴの生息には二枚貝が必要ということは、知識としては理解していましたが、その組み合わせに至る生物の戦略の関わりは共生という生易しいものではなく、むしろ生存のための戦いの結果であるということがよくわかった講義でした。つまり、お互いの切磋琢磨が、他の生物の組み合わせを排除せざるをえなくなったということなので、簡単に言ってしまえば、その戦いについていけなくなった生物が、次々に競争から降りて、独占状態を勝ち得たということです。虫からいえば改良を重ね、植物からいえば香という毒素を強力にして自己を守ってきたということです。多様性という言葉は、わかっていそうで良く理解できていない概念の典型ですが、やはり奥は深かった。

このシリーズの常套手段で、たとえば、この多様性という言葉を風景に対して用いるとどうなるか。「風景の多様性」という言葉は創るのは簡単にできますが、この言葉の意味することはいったい何なのか。少し考えてみましょう。

先月の名古屋で開かれたCOP10生物多様性国際会議では、生物多様性を次の 3 つの段階で区分しています。いわゆる「生態系の多様性」「種の多様性」そして、「遺伝子レベルの多様性」です。ここでいう遺伝子レベルというのは個性のようなものです。

ある風景とは、いくつかの生態系の集まりであったり、里山に代表されるように固有の生態系のような集合体としてとらえられます。そして、風景には、その生態系としての自然環境に中に人間の営みが加わり、その姿として創り出されているものと考えられることができます。同じ形態を持つ生態系の中でも人の営みの在り方が変われば、当然風景は変わり、その変わり方にもプラスの影響マイナスの影響が複雑に絡まり、固有の風景を形づくります。特に、「街」は、人間という生物の 1 種と園芸植物の数種で構成される生態系の空間であると考えることもできます。また、「田園」は、イネ科の植物を中心とした人間の関与により安定的な形態を維持している生態系と考えることができます。ただ、これらは、生物多様性という考えで見た場合で、風景多様性という切り口で見るとどうなるでしょうか。おそらく、「風景」＝「生物」で置き換えるのではなく、「風景」＝「生態系」と思われます。そして、人間も含め生き物、人工物などの存在が「種」になり、個々の橋梁の違いは、個性、つまり「遺伝子レベル」の物と当てはめることができます。つまり、「風景の多様性」は、「生態系の多様性」と同レベルであり、「生物の多様性」は、風景の多様性を包括した「場の多様性」と同レベルのことと当てることができるのではないでしょうか。

さて、この整理をしたうえで、生物多様性と同じ危惧を考えるとどういうことになるのか。「場」というものの多様性が失われ、単調



なものとなることで、場の脆弱性が生まれ、これまでいろいろなサービスを提供していた「場」の価値が下がり、「場」から恩恵を受けるチャンスが失われていくということと置き換えることができます。

これまで考え続けてきた「風景デザイン」の必要性は、人間生活の基盤であるこの「場」そのものの価値が下がってきているという危機感につながるのでは。街並みをデザインし固有の風景を創出することや、背景となる山々の自然の姿を活かした公共施設のデザインを行うことは、より快適な空間を創り出すというぜいたくな行為ではなく、これまで多くの価値を提供し続けてきた「場の多様性」を維持するあるいは回復されるための欠かせない行為なのかもしれません。無理やりの当てはめかもしれませんが。

また、風景デザインをおこなうことが正しいことと言えるためには、風景の多様性は、厳選された技術の応酬により構成されていくことが欠かせない、でなければ淘汰される風景となるということです。淘汰された風景とは、この場合は、だれからも見向きもされない風景、忘れ去られる風景、「場」でなくなってしまった空間ということでしょう。　　【続く】